

第六回星野立子新人賞

「雲と父」

小山 玄黙

軒先を夕日したたる長命縷
風が音もたぬ高さを桐の花
更衣波待つごとく駅に立ち
あかつきの枕やはらか杜鵑
糸引のひとつず湯氣にまぎれざる
客間まで雨の聞こゆる水羊羹
一閃の蝶の過れる安居かな
白靴や母の支度の遅きこと
破風に棲む百花百獸みなみかぜ
心太男は旅の荷の少な
うつすらと水鉄砲の水余る
家中に使はぬ曆冷奴
病葉や早瀬のことがやける
草市のたたまれてなほ匂ひけり
四肢刺せば水とびちれり瓜の馬
鯛や押入の板ざらつける
子機ばかり汚れてをりぬ花木槿
稲妻や火酒のあかがね黄金透け
ひとしづくほどの影あり螢草
佃煮の暗さそれぞれ秋の風
真葛原だしぬけに猫通りけり
秋蝶を流す開会式の空
物置の屋根傷みをり松手入
崩れ築越えてより水かるがると
さなきだに夜はしづかなり菊枕

つとめての厨の冷えも神無月
梢より高きに蒲団干しにけり
硝子戸をごろごろ開けて実万両
酉の市静かに買つてゆく人も
十年は空の菓子箱帰り花
吸入器ぼんやりと星数へつつ
走り根に濃き日溜や飾売
年惜しむ恰幅のよき万年筆
初旅のおばしまの影踏みゆけり
朝日差すところに掛けて初曆
客の来ぬあはひを糸編んでをり
次の間のうつすら烟る囲炉裏かな
鴛鴦のほかは貧しき池なりけり
汚れたる雪の色して梅の花
雲雀東風地藏どうしは顔知らず
朝といふ余らぬ時間浅蜷汁
剪定や同じ高さに雲と父
雛飾夕日をもつて仕上がりぬ
湖よりも岸しづかなる初桜
石鱸に淡き英字よ春の風邪
水温む年輪は日の暈に似て
風船に空隠されて風船売
芽柳や船収まらぬ橋の影
アパートの名のややこしき白躑躅
貝殻も羽も対なす遅日かな雲と父